

ありません。⁴⁵Caを使用して、その吸収と気孔の数や開閉との関係を調べたのですが、関係は認められませんでした。また、吸収時間については、葉の表面で乾かずにいる時間が長いほど吸収は良くなりました。したがって、日中の葉に散布した液体が乾きやすい時間帯は、葉面からの吸収効率は悪くなります』という情報が寄せられた。液肥がクチクラを容易に通過する情報は新鮮であり、

質問者や他の情報提供者にはメール転送で速やかに伝えるとともに、Q&Aのデータベースに追加した。

引用したインターネットアドレス

Web1. <http://www.yakugai.gr.jp/seirogan.html>

Web2. <http://www.env.go.jp/press/press.php3?serial=1497>

Web3. <http://www.acis.go.jp/toroku/sikkou.htm>

肥料と切手よもやま話 (6)

越 野 正 義



副生硫アンと肥料の色

この切手のランパジウスは肥料にはあまりなじみがないが、石炭ガスを使った照明灯を1799年ドレスデンで始めたドイツの化学者である。右の切手には最初のガス灯が描かれている。石炭ガスは石炭を乾留して作った。ガス灯は日本にも明治の開国とともに導入され、西欧文明の象徴となった。

石炭のガス化とともに生産され始めたのが硫アン(副生)である。石炭1tにつき2~3kgのアンモニアが得られるので、これを硫酸に吸収させた。わが国の硫アンの始まりは1896年に鈴鹿保家がオーストラリアから輸入した副生品である。1901年には東京瓦斯が生産し始めた。合成硫アンが出現する前のことである。

ところで副生硫アンといえばその色が問題となった。川島禄郎「肥料学」(1929)にすでにこの色が記載されている。着色物は、タール質夾雑物により灰色または暗褐色、硫化ヒ素により黄色、鉄により淡黄色、シアン化鉄により緑色、フェロシアン化鉄(III)により青、硫化鉄により暗色、アニリン色素により緑色、チオシアン酸鉄により赤色を呈し、色彩豊かである。ただし現在の製品は不純物の除去が行われ、着色はごく淡い。

色の有無は肥効にまったく関係はない。しかし肉眼ですぐわかるだけに案外クレームとなりやすい。リン鉱石の種類を変えただけで色が違うと苦情がくる。去年の肥料と違うといわれるとメーカーは対応に困る。

いっそのこと着色してはと考えると、消雪効果などの使用目的がないと認めてくれない。ブランド均一化効果などの名目ではだめなのだろうか。

(財 日本肥糧検定協会 参与)